余命僅かの悪役令息に転生したけど、攻略対象者達が何やら離してくれない４

「アイツは昔っからチビ一筋で、これからもそうだ」
「自分自身がフェリの敵になる可能性……それが俺は恐ろしい」
「ディラン兄様、僕のこと、嫌いじゃない……？」
トラード
ローズの従者であり、暗殺者。愛想が良く、ノリがいい。ディランの前に現れ……!?
ローズ・シュタイン
シュタイン伯爵として生きているが、実は暗殺者。フェリアルを狙っているようだが——
ディラン・エーデルス
フェリアルの兄。無表情に見えるが、フェリアルを深く愛している。しかし、今回とある事件に巻き込まれ……？
ガイゼル・エーデルス
フェリアルの兄。口は悪いが、フェリアルを大切にしている。
ライネス・ヴィアス
ヴィアス大公家の嫡男。フェリアルと共に生きる道を虎視眈々と狙っている。
シモン・ロタール
フェリアルの専属侍従。フェリアルのためであれば、どんなことでもできる。
フェリアル・エーデルス
転生したら、ゲーム内で全員に嫌われる『悪役令息』だった。シナリオの強制力に負けず、頑張り始めている。
Characters

プロローグ

『聖者の薔薇園』の世界に転生して、早くも十年が経とうとしていた。

誰からも愛されなかった成瀬としての前世とは異なり、今世ではたくさんの愛情をもらって、僕は自分の運命を覚悟しながらもそれなりに前向きに生きていた。

今まで、ゲームにはなかったたくさんの出来事が起こったわけだけれど……その中でも一番大きな事件を挙げるなら、やはり大公家の運命を覆した例の件だろう。

大公家のシナリオを改変した影響は大きかった。

ゲーム本編では、ライネスを攻略対象者として成り立たせるために『大公家の悲劇』は必須の過去ストーリーだった。それを変更したために、帝国全体の動きがゲームとズレ始めたのだ。

その中でも最大の差は、生きていれば作中最強とまで呼ばれた、大公フレデリック・ヴィアスが生存したことである。

ゲームでは、大公の死によって帝国にあらゆる変化が起こった。

一つは、皇族の次に権威を持つ大公の座を、若くしてライネスが継いだこと。

そして両親の死で心を閉ざしてしまったライネスは、他の領地との交流を絶ち、北部を完全な鎖国状態にしてしまった。そのため、今のように他地域との活発な交流もなく、ましてやエーデルス公爵家と懇意になることもない。

しかし現実の大公家は、周囲と盛んな交流をする家門となった。

また、ゲーム内では、フレデリック・ヴィアスの死によって、皇太子レナードが孤独になる。

他人を信頼しない皇太子が唯一心を開いていた従兄弟、ライネスが北部に閉じこもってしまったせいで、レナードが孤独を突き付けられることになるのだ。

ただでさえ冷酷無慈悲な人物であるレナードの、最後の良心ともいえる部分が完全に壊されてしまうのである。

これは、後にゲームで描かれる、レナードから悪役フェリアルへの悪逆な仕打ちを激化させる原因にもなった。けれど、現実ではライネスとレナードの交流が絶たれることはなく、大公家の平穏が戻ったことで、むしろ二人の間には以前よりも強固な信頼関係が生まれた。

つまり、大公家の件で、他の攻略対象者たちの過去ストーリーにも変化が生じただけでなく、キャラクター達の本来の人物像までが大きくズレ始めたのだ。

多少シナリオが変わってしまうことは覚悟していたけれど、まさかここまで大きく変化が起きてしまうなんて。

中でも最近一番困っていること――それは、悪役フェリアルの過去編にも予想外の変化が起こったことだ。

兄様たちやレオたちに散々鈍いと言われる僕でも、ゲームと現実の違いについては察している。

それは、ゲームとは全く異なる悪役の交友関係や、攻略対象者たちの動き、心情だ。

弟を憎悪する公爵家の双子は、弟にとても甘く優しい兄達に。

聖者を崇拝し、悪役（フェリアル）を嫌悪するはずの皇太子は、聖者への執着が見られない穏やかな友人に。

全てを失い壊れてしまった大公子は、全てを取り戻して平穏を手にした良き理解者に。

悪役フェリアルの周囲を取り巻く人間関係も、環境も、全てがゲームと異なる方向へ進んでいる。

今のところ『運命』が発動する様子もない。

それは今の僕にとっては良いことかもしれないけれど、だからこそ焦燥も増していく。

こんなに幸福を味わってしまって、いざ『運命』が発動した時に突然全てを失ってしまったらどうすればいいのか。

もしかすると、ゲームの開幕から終幕まで常に悪役で在り続けたフェリアルよりも、ずっと深い絶望を突き付けられる結果になるのではないかと。

そう思うと、幸せなはずの今この瞬間も、なんとか早く『運命』が発動して、正しいシナリオに戻ってほしいと本能が望んでしまう。

けれど、そんな思いに反して現実はゲームから逸脱していくばかり。

この先のシナリオが果たしてゲーム通りに進むのかどうか、僕は内心かなり不安になり始めていた。

【フェリアルの家庭教師】

ライネスとの出会いから早くも一年以上が経ち、兄様達は高等部の二年生に進級した。
皆がいない生活にも慣れてきて、十歳の誕生日を控えた僕も、そろそろお兄さんへ成長するために何かしら新たなことをしようと考え始めていた。
そんなある日。それは、ゲームの本編開始を四年後に控えた、寒い冬の朝のことだった。
僕はいつもよりも早起きして、自室のソファで数枚の調査報告書と向き合っていた。
「むぅ……」
報告書の内容は、ずばり僕の家庭教師候補たちのものだ。
実は兄様達が学園へ入学したタイミングで、僕にも家庭教師をつけてはどうかという話が邸内で挙がっていた。色々あったせいで、それが先延ばしになっていたのだ。
色々というのは、主に大公家のことだ。
しかし、最近では慌ただしい日常もだいぶ落ち着いてきた。そういうわけなので、改めて家庭教師の話が持ち上がったというわけである。
けれど僕は、一向に家庭教師を決められないでいた。
その理由こそ、たった今難しい顔で向き合っているこの調査報告書である。

僕は調査報告書に目を走らせ、ぐったりと項垂れた。
「みんな、いいひとじゃなさそう……」
「えぇ、えぇ、その通りです。今回集まった志願者も全員調べ尽くしましたが、今回も！　やはり揃いも揃ってフェリアル様の家庭教師には相応しくない者ばかりでした！」
今回もダメそうだと呟くと、傍に立っていた侍従のシモンがうんうんと頷いた。
緩く纏められた茶髪のお団子がはらりと揺れ、夏の木の葉のような緑色の瞳が真剣な色を帯びる。
そんなシモンの真面目な様子を見て、僕は難しい表情を浮かべて唸った。
実は、この調査報告書は僕が正式に頼んだものじゃない。
初めは履歴書だけ確認していたのだが、僕に家庭教師をつけるという話を嗅ぎつけたシモンが、独断で志願者たちの身元調査を始めたのである。
シモンが僕に押し付け……持ってくる報告書の内容は、どれも詳細で正確なものだった。そして、その全てに調査対象者の悪い調査結果が記されていた。
まるで、なんとか悪いところをアピールしようとでもしているのかと、そう思ってしまうくらいの執念深い調べようだ。
今まさに読み進めているこの報告書なんかも良い例である。
「この人は、家族がいるのに浮気してて……こっちの人は、お酒を飲むとよくあばれる……」
「ね？　どいつもこいつもダメダメでしょう？　今回も全員落とすべきです！」
僕の家庭教師に！　と志願してくる先生たちは、みんな頭のいい人ばかりだ。

実際に学園で講師をしている人や、留学経験のある学者さん、秀才と名高い数学の教師まで。
お給料が魅力的な公爵家の求人ともなると、志願者も素晴らしい経歴を持つ人でいっぱいだ。
けれどシモン曰く、その素晴らしい経歴を持った志願者たちは全員、裏では教師として相応しくない言動をしているらしい。そしてそれは、シモンが与えてくる報告書を読む限り事実なのだ。
とはいえ一般的には履歴書だけ見て決めるわけだし、調査報告書まで加味しなくても……
家庭教師というものが貴族の令息に求められるのだから、多少は……と思いつつ、僕は報告書から顔を上げる。
「でもみんな、お仕事はまじめにしてるみたい。それなら、プライベートのことは、ちょっとくらいおめめをつむっても――」
「駄目です！　ぜぇーッたい！　駄目！」
採用基準を緩めてもいいのでは？　と遠回しに告げると、シモンは顔を顰めて首を振った。
あんまりにも盛大に否定されたものだから、思わずびっくりして固まってしまう。
シモンは拳を握り締めて力説した。
「子供にとって、教師という存在は今後の人格形成にも強く影響する重要な存在なんですよ!?
フェリアル様の家庭教師ともなると、非の打ち所がない完璧な者にしかその役割は任せられません！」
ものすごく早口で捲し立てられ、はわわ……と仰け反った。
どこで息をしていたのだろう。シモンったら、なんだかいつもの余裕がなくて様子がおかしい。

「シ、シモン、ちょっぴり、おちついて……」
「落ち着いてどうするんですか！　フェリアル様はもっと焦ってください！」
「はわわ……」
「家庭教師ですよ!?　家庭教師！　どんだけ重要な案件かちゃんと分かってます!?」
ひえぇ、と涙ぐむ。シモンが本気すぎてちょっぴり怖いよぅ。
「で、でも、先生は教えるひとだから……お勉強、きちんと教えてくれるひとならそれで……」
「舐めないでください！　お勉強を教えるだけならその辺の馬鹿でも出来ますでしょうが！」
「ぴえぇ……」
いつになく感情的なシモンを前に、思わず情けない声を漏らしてしまった。
どうやら家庭教師の案件は、シモンの過保護センサーをそれはもう強く刺激してしまったらしい。
「あ、あの、でも、そろそろ決めなきゃ……」
シモンの様子を窺うように小声で語る。
採用を慎重に判断するのも大事なことだけれど、いい加減誰にするか決めないといつまでも勉強を始められない。
それに、僕に優秀な家庭教師をと人材を探してくれているお父様にも、そろそろいい人を採用出来たと報告してあげたいし……
そう言うとシモンは顔を顰めたまま、ふと短いため息を吐いた。
「……仕方ないですね。それなら、ひとまず一番マトモそうな人間を仮採用しましょう」

「かり、さいよう……？」
聞き慣れない言葉にぱちくりと瞬く。
シモンは強く頷くと、反論を許さない硬い声でセリフを続けた。
「三日間だけ授業をしていただいて、フェリアル様の教師に相応(ふさわ)しい人材だと判断したら正式に雇います。それでいいですね？」
「えっと……」
「いいですねッ!?」
「ひゃっ、ひゃい！」
シモンの圧に押され、僕はこくこくっと涙目で頷くことしか出来なかった。

家庭教師の仮採用はあっさりと進み、あっという間に授業初日が訪れた。
あれだけ教師選びが難航していたのが嘘のようだ。最大の壁だったシモンが、正式な採用ではないからと渋々ながらも納得してくれたのが大きかった。
授業用に用意してもらった部屋のドアを開き、僕は緊張しつつ、先生と顔を合わせた。
仮採用した教師は、留学経験のある地方貴族の男性、アドルフ先生だ。
年齢はお父様と同じくらい。中肉中背で平凡な顔立ちの温厚そうな人である。
「先生、はじめまして。フェリアルです」
教卓と机がぽつんと向かい合っていて、それ以外は黒板があるくらいのシンプルな部屋。お行儀

よく机につく僕の斜め後ろには、なぜかシモンが控えている。
授業だから、先生と二人きりでいいって言ったのにな……なんて、困惑が湧き上がるけれどシモンには何も言わない。
今回の家庭教師の件、シモンはずっとピリピリしているからあまり刺激しないようにしないと。
僕が背筋を伸ばして返事を待っていると、アドルフ先生はにっこりと微笑んだ。
「はい、初めましてフェリアル君。授業を担当するアドルフです」
その言葉に、僕は思わず笑顔になった。
すごい、なんていうかものすごく、授業っぽい！
僕もお勉強を教わるお兄さんの年齢になったんだ！　とほくほく喜んでいると、その和(なご)やかな空気を切り裂くように、背後から冷淡な声が聞こえてきた。
「失礼ですが、フェリアル様のことは敬称を付けてお呼びください。教師といえども公爵家の令息に対して最低限の礼儀は払っていただかないと」
漂い始めていたいい感じの雰囲気は、シモンの言葉によって木っ端微塵になった。
アドルフ先生は目を見開くと、一歩後ろに下がって胸に手を当てる。
「おっと……これは申し訳ございません。フェリアル様、よろしくお願いいたします」
「えっ、あ……」
先生が改めて僕に頭を下げる。
さっきの親しみやすさは掻き消え、堅苦しい笑みと声を向けられたことに少し悲しくなった。

確かにシモンの言う通り、僕は公爵令息で先生は地方貴族だけれど……でも、今は教師と生徒という関係なのだ。重視すべき関係性は後者じゃないのだろうか。
「っ……先生！　敬称はなくて、大丈夫です！」
「え、ですが」
「いいんです！　僕がいいので、いいんです！」
ピシッと挙手して宣言すると、先生は僕の後ろを窺うような様子を見せながらも「フェリアル様が仰るなら……」と頷いた。
よし。シモンはこれから説得しよう。
僕はふんすっと意気込みつつ振り返った。
「シモ――ッぴぇ！」
「……」
普段の甘く蕩けるような笑みは鳴りを潜め、そこには感情の読めない無機質な表情があった。
シモンの心が仄暗く沈んでいる時、澄んだ緑の瞳に現れる真っ黒な深淵。それが顔を覗かせている。漆黒に染まったシモンの瞳が、僕にまっすぐ向けられた。
「シ、シモン、あの」
どうしてだろう。どうして、シモンは今回の件にこんなにも警戒を見せているのだろう。
よくわからないから困惑する。シモンに暗い視線を向けられることに慣れていない僕は、上手く言葉を紡げずに身体を震わせることしか出来なかった。

「……他でもないフェリアル様のご判断なら、俺は何も言いませんよ」
淡々と語るシモンに何も返すことが出来ず、気まずい空気の中、そっと姿勢を戻す。
ちらりと顔を上げると、先生は僕の視線にこめられた意図をすぐ察して頷いてくれた。
「それでは、授業を始めましょう。最初なので、まずは基礎を学びましょうか」
「は、はいっ。よろしくおねがいします」
そうして授業が始まると、だんだん硬い空気は解(ほぐ)れていった。
授業の科目は歴史で、基礎的な帝国の史実や、神殿と皇族の関係性などを学ぶことになった。
先生の言う通り、これは基礎の基礎だ。絵本に描いてあるような知識だから、僕でもスラスラ理解できる易しい授業だった。
教え方も優しくて、僕が理解に追い付けずにいるとしっかり説明してくれる。理想的な先生という感じで、僕は初日にもかかわらず早くも先生を正式に採用したくなっていた。
教科書として設定された本を開き、先生を呼ぶ。
「せんせ、あの、これって」
「うん？　どれどれ……あぁ、歴代皇室の家系図ですか。この辺り、名前が似通っている先代が多くてややこしいですよね」
レオナルドやらレイナルドやら、なんだかこんがらがってしまいそうな名前続きの家系図だ。
それに加えて、皇室の歴史は初代に近付くにつれ神殿との関係が親密になっていくから、ある世代を境に洗礼名まで増えて暗記が難しくなっている。

ぐぬぬ……と唸っていると、先生はクスクスと笑いながら教科書を手に持ち、皇室の細かい史実が記されたページを開いた。
「こういうのは、物語だと思って史実と一緒に覚えるのがいいですよ。ただの暗記科目と思うより、読書をする感覚で見れば自然と頭に入ると思います」
「むぅ、なるほど……」
プライベートな記録まで記された史実を、どれどれと思いながら読んでみる。
七代目皇帝のレオナルドさんはおっちょこちょいな性格で、よく式典に冠を忘れて参加していた。
九代目皇帝のレイナルドさんは病弱で、剣術の腕はイマイチだけれど誰よりも頭脳明晰だった。
……ふむふむ。確かに、本を読んでいると思えばとっても覚えやすいかも！
「す、すごい！　先生、ありがとうございます、とっても覚えやすいです！」
ふおぉっと瞳を輝かせると、先生は一度ぱちくりと目を丸くした。
けれどすぐにニコリと笑みを浮かべ、ふと教科書を机に置いて僕に腕を伸ばしてきた。
「……む？」
ぽん、と頭にのった重みに呆然とする。
無意識に視線は背後に向かって、驚きで止まったままの意識は自然とシモンに向いた。
「……ぁ、れ？」
――いない。いつの間に席を外したのか、シモンは部屋からいなくなっていた。
授業の邪魔をしないようにと気を遣ったのかもしれない。

もしくは僕の頑固な態度に嫌気がさしたのかも。
理由は分からないけれど、とにかくシモンがいない現状が、なんだかすごく不安で……
「あっ、あの、せんせ」
柔らかく僕の頭を撫でる手は、一向に離れる気配がない。
硬直したままなんとか声を上げると、先生はようやく僕の頭から手を離した。
「あぁ、すみません。可愛らしい反応を見せるので、つい」
明るい笑い声が耳に届き、そろりと視線を上げる。
「フェリアル君は、素直でとっても可愛いですね」
照れたような、困ったような色が宿る先生の笑顔は、悪いものには見えなかった。
けれど、けれど、どうしてだろう。なんだか、ゾワッとした感覚がどうしても止まなくて。
「……ぁ、あ、えへへ」
優しい先生に対して、一瞬でも後ろめたい感情を持ってしまったことが申し訳ない。
複雑な気持ちをどうしていいか分からない僕は、先生の気分を害さないようにと、ただ愛想笑いをこぼすことしか出来なかった。

その日の夜。
仮授業の一日目を無事に終えた僕は、明日の予習のために自室で教科書を読んでいた。
ついさっき湯浴みを終えたばかりなので、今はシモンが僕の髪のお手入れをしてくれている。い

つもならわいわいと談笑を楽しんでいるところだけれど、なんとなく気まずくて、僕はシモンと一言も口をきかず予習に取り組んでいた。
その時だった。
ずっと黙り込んでいたシモンが恐る恐るといったように口を開いた。
「……あの、フェリアル様」
振り向くと、櫛で優しく僕の髪を梳かす動作はそのままに、シモンは不安そうな顔で僕の返事を待っていた。
その姿を見てなんだか胸がじんと熱くなった僕は、教科書を閉じてそっとテーブルに置いた。
「うん。なぁに？」
もう一度振り返ってそう聞く。
手持ち無沙汰に膝上で手遊びしながら、今度は僕がシモンの答えを待つ。
短い沈黙の後、蝋燭の火が淡く照らす寝室に、小さな声が静かに響いた。
「今日は、本当にすみませんでした……フェリアル様の傍に他人が近付くのは滅多にないことなので、心配してしまって……侍従の立場で出過ぎた態度をとってしまいました」
櫛が離され、今度はシモンが手櫛で僕の髪を優しく撫でる。
その手つきはとても安心感があって、脱力しそうなほど心地良くて、先生に撫でられた時とはまったく異なるその温かさで。僕は思わず視界を滲ませた。
「……ううん、いいの。シモンは、なんにもわるくないの。僕の方こそ、ごめんなさい……っ」

その時、僕はようやく自覚した。
どうやら日中から、ずっと緊張で身体が強張っていたらしい。たぶん、先生に『可愛い』と言われて頭を撫でられたあの時からだ。
どうしてかは分からないけれど、僕はあの時の先生の対応があまり好きではなかったらしい。
「ごめっ……！　ごめんね、しもんっ……ぼく、僕のこと、きらいにならないでぇ……っ」
ぽたぽた、と膝にのせた手に大粒の涙が零れ落ちる。
強張っていた身体から一気に力が抜けて、涙腺が決壊してしまったようだ。
「フェリアル様……」
切実な感情が籠った声が背後から聞こえたかと思うと、シモンは急かされるように駆け足でこちらに回り込み、僕の正面に膝をついた。
「あぁ、そんなっ……フェリアル様、泣かないで……」
シモンの大きな手が僕の両頬を包み込む。涙を全て受け止めようとする骨ばった手に、僕もそっと自分の手を重ねた。
あぁ、これだ。求めていた温もりは、まさにこれだ。
シモン、僕の大好きなシモン。勉強を頑張って、頭が良くなって、僕はただ他でもないシモンに褒めてもらいたかった。
毎日ポカをする、至らない僕のお世話をしてくれるシモン。そんなシモンに、僕は実はやればできる子なんだよって、こんなに賢い子なんだよって、そう自慢したくて。

家庭教師を雇う件について前向きだったのも、そんな下心が一番大きかったのだ。
いつもの甘い笑顔で『流石フェリアル様、天才です！』と、いい子いい子と褒めてほしかった。
あんな冷たい目を向けられたかったわけじゃない。僕はただ、ただ……
「ひぅっ、んぇ……うあぁ……っ！」
嗚咽が喉に引っかかって、下手くそな泣き声が鼻水と一緒に漏れる。
お世辞にも上手とは言えないだろう僕の泣き顔を間近で見たシモンは、緑色の瞳を大きく揺らして、次の瞬間グッと何かを堪えるように表情を歪めた。
「あぁ、あぁッ、フェリアル様……ッ！」
ぎゅうっと、一切の隙間も許さない強い抱擁を受ける。
僕もすかさずシモンの首に腕を回し、涙が止まらないままシモンの肩に顔を押しつけた。
不思議なことに、僕の耳まで濡れた感触がある。見上げるとシモンも緑色の綺麗な目からぽろぽろ涙を零していた。
「嫌いになんてなるわけないでしょう……むしろ、日中はずっと俺の方が怯えてましたよ……あんな態度をとって、フェリアル様に嫌われてしまったらどうしようって」
「ばかぁっ……！　ぼくっ、ぼくのほうが、こわかったもん……！」
「いいえ、いいえ、俺の方が怖かったです！　どうすればフェリアル様に許していただけるかと、頭を冷やしている間ずっと考えていたんですよ！」
二人揃って涙をぽろぽろ零して、傍から見るときっとすごくカオスな状況だ。

ごめんね、ごめんねとお互いに謝罪の言葉をかけ合うのは、なんだかとってもくすぐったい感じがしたけれど、抱え込んでいた不安が一斉に解消されたような気がして、僕はものすごく安堵した。
「ごめんなさい、ごめんなさいフェリアル様。俺、きちんと見守ります。フェリアル様の大切な成長過程を邪魔しないように、きちんと一歩引いたところから見守ります」
耳元で、シモンが切なさを帯びた声を零す。
それを聞いた途端、焦燥にも似た激しい感情が湧き上がる。一瞬、シモンと一緒にいられるなら家庭教師なんていらないんじゃないかとも思った。
けれど、これは成長のために必要な大切な過程なんだと自分に言い聞かせて、溢れそうな衝動をグッと堪える。
「……ん、うん。僕も、がんばる。あと二日、おわるまで、見守っててくれる？」
「えぇ、もちろんです。少し離れたところから、俺はいつでもフェリアル様を応援しています」
むぎゅっと抱き締め合って、これで仲直りねと二人で笑みを浮かべる。
就寝時間になってベッドに入ってからも、お喋り出来なかった昼間の分も含めて寝落ちするまでシモンと語り合った。

＊＊＊

そうして迎えた、授業二日目。

シモンとしっかり話し合い、授業の時間は僕だけで先生と会うことにした。
だから、今日からはシモンの監視がつかない。僕はいてもいいよと言ったけれど、シモンがケジメのためと言って断ったのだ。
『遠くから見守っていますね。終わったら、頑張ったご褒美にお菓子を食べましょう』
朝、シモンと交わした言葉を思い返して頬を緩める。
そうこうしていると授業の時間になり、先生が教室に入ってくる。
僕はキッチリ姿勢を正して先生に挨拶した。
「先生、おはようございます！」
終わったらシモンとおやつ……
そわそわと頬を染めていると、先生は上機嫌な僕を見てきょとんと瞬いた。
「おはようございます、フェリアル君。なんだか嬉しそうですね。授業が楽しみだったんですか？ふふ、感心です」
「へっ……あ、はいっ。とっても、たのしみでした」
ニコニコと笑う先生を見上げて、一瞬ぽかんとした後に慌てて頷いた。
シモンとのおやつが楽しみでルンルンしていたのだけれど……ま、まぁ、授業が楽しみだったのも嘘じゃないから肯定しておこう。
僕が頷くと先生は上機嫌になって、ニコニコしながら授業の開始を宣言した。
「それじゃあ、今日は昨日より少し難しいところを勉強してみましょうか」

難しいところ、という言葉に背筋がピンと伸びる。
歴代の皇帝について学んだ昨日の授業も、実はそれなりに難しいと感じたのだけれど……もうあれ以上の内容になると言われるとなんだか緊張する。
「そうですねぇ。周辺各国も含めた戦争の歴史なんて学んでみましょう」
「……？　しゅーへ、かっこく、せんそー？」
先生がにこやかに語った内容を聞いて、思わず青褪めた。
ど、どうしよう。思ったよりもずっと難しそうだ。既に何を言っているのかさっぱりわからない。
とりあえず、戦争についての授業らしいけれど……それって確か、学園でも中等部以上の子が学ぶものじゃなかっただろうか。
以前お父様の書斎でそういう本を手にしてしまった時、お父様にそう教わった気がする。
「あの、それ、いまお勉強していいやつ、ですか？」
先生ったら、もしかして僕の年齢を勘違いしているのかも。
やんわりその意図を含んだ問いを投げかけると、先生はきょとんと首を傾げた。
「はい？　どうしてそんなことを聞くんです？　先生が、今日は戦争について授業すると言っているんです。先生の決めたことに生徒が異論を唱えるのですか？」
「へ、あぇっ……」
こちら側にヌッと身を乗り出してくる先生を見上げて、思わず怯えて涙ぐむ。
気のせいだろうか、なんだか先生の様子がおかしい。

昨日はあんなに優しかったのに、今日はなんだか強引というか、ちょっぴり怖い……
「ぁ、あの、ぼく……っ」
じわりと視界が滲む。
至近距離まで迫る先生の顔を見て、僕はやがてきゅっと身体を縮こませた。
「……な、なんでも、ないです。きちんと、お勉強します……」
蚊の鳴くような震えて小さな声をなんとか紡ぐと、先生は嬉しそうにニコリと笑った。
「よろしい。ふふ、やっぱりフェリアル君は、素直でとっても可愛いですね」
そっと伸びてきた手が僕の頭を優しく撫でる。
その瞬間、昨日感じたものと同じ不気味な心地悪さがゾワッと身を襲った。
けれど、もし嫌がるような反応を見せて先生を怒らせてしまったらと思うと怖くて……
僕は俯きがちに愛想笑いを零しながら、シモンの名前を心の中で呼び続けた。

奇妙な空気が漂う中、二日目の授業は淡々と進んだ。
先生が分かりやすく説明をして、僕がそれを聞いて、たまに先生から問題を出される。
大体の流れは昨日と似通ったものだけれど、一つだけ大きく異なるところがあった。
それは、質問に間違った答えを返してしまった時の先生の反応である。
「フェリアル君、また間違えましたね。ついさっき説明したばかりでしょう」
「あぇっ、あ、ごめんなさ……っ」

「謝罪は結構です。もう一度、先生の問題に正しい答えを返してください」
この通り、なんだか先生の対応が冷たくなっている気がするのだ。
でも、それはきっと僕の頭が悪いせいだろうし……先生は悪くない。実際、僕がちゃんと問題に正解すれば、先生は昨日みたいに優しく褒めてくれるし。
だから、耐えなきゃ。ちゃんと授業に集中して、先生からの問題は間違わないようにしなきゃ。
授業って、きっとそういうものだろうから。
なんて思いながら授業を聞いていると、僕はまた先生から投げかけられた問題を間違えてしまった。
「あ……ご、ごめんなさい。あの、もう一度、教科書、みていいですか……」
この問題の正解はなんだっけ。
教科書に説明が書かれているだろうし、もう一度確認すればきっと分かる。
そう考えて先生に尋ねると、先生は冷たい顔をして僕をジッと見下ろしていた。
「ぁ……あの、せんせ……？」
ぷるぷると震えて、不安と恐怖で身体から力が抜ける。
何度も間違えてしまう僕が悪いのは分かるけれど、それにしたって先生の怒り方はすごく怖い。
だから、震えが止まらない。今度はどんなお説教をされるのかと。
「ぁの、ごめ、ごめんなさ……」
俯きがちに小声で謝罪しようとした時だった。

ふと視線の先にある机に、先生が持っていた教科書を勢いよく叩きつけた。
――バンッ!!
「ひぅ！」
机が揺れて、僕も思わずぴょんっと飛び上がる。
すぐにカタカタと震えながら身体を縮めた。一体何が起こったのかとものすごく混乱する。
僕がごめんなさいをしようとしたら、先生が僕の机に教科書を叩きつけて、それで……？
「っ、あ……ぁ」
あぁ、どうしよう。頭がきちんと回らない。怖くて、上手く呼吸が出来ない。
恐怖で血の気が引く音が聞こえるようだ。
やがて先生の淡々とした低い声が静かに響いた。
「フェリアル君、がっかりです」
失望に染まった声を聞いて、ついにじわりと涙が滲んだ。
がっかり。それは相手を突き放す言葉だ。つまり僕は今、先生に突き放されたのだ。
前世でも、それは何度も聞かされた言葉だった。
『――本当がっかり。優馬(ゆうま)はあんなに出来た子なのに』
もうほとんど忘れかけていたのに、今になって前世の母親に言われたセリフを思い出した。
前世では、みんなが僕にがっかりしていた。
優秀な優馬とは違って、僕にはなんの取り柄もなかったから。

がっかりという言葉は、苦手だ。今だって、その言葉を聞くだけであの頃のトラウマが蘇って、震えが止まらない。
「っ……」
何も言えずにただ震える僕を見て何を思ったのか、先生はふと短いため息を吐いた。
「はぁ、もういいです。フェリアル君は、真面目に授業を受けたくないんですね」
「え……そ、そんなっ、僕、まじめに……」
涙目になりながら首を振ろうとすると、先生がのそりと動いて僕に一歩近付いた。
「フェリアル君、立ってください」
「へ？」
唐突な指示にきょとんと固まると、すぐに苛立ったような声で繰り返された。
「立ちなさい、と言っているんです」
「っ……！」
高圧的な態度を前に、困惑を言葉にする余裕もなく、慌てて立ち上がる。
いよいよ涙が溢れそうになると同時に、視界に大きな影がかかった。
「……？　せんせ――」
一体何をするつもりなのかと、眉尻を下げながら先生を呼ぼうとした時。
その呼び掛けは、パシッ！　と乾いた音が鳴り響いたことで遮られた。
「……へ？」

一瞬、視界がぐるりと回った。
自分の意思とは関係なく顔が右を向いて、直後に左頬がジンジンと痛み出す。
「はぇ、え……？」
呆然と左頬に手を当てる。鈍い痛みを訴える頬は、そこだけ酷く熱を伴っていた。
指先にその熱さが伝わって、しばらく硬直した後にだんだんと状況の理解が追いつき始める。
あぁ、叩かれたのか。
未だにぐるぐると混乱が脳を支配する中、なぜだかとても冷静にそれを理解した。
けれど、突然叩かれたことへの困惑や衝撃も確かにあって、堪えていた涙がついに溢れてしまう。
ぽろぽろと机に落ちる滴を呆然と見下ろしていると、やがて先生が困ったように語り出した。
「これは罰です。物分かりの悪い馬鹿な子には、きちんと真面目になってくれるように罰を与えなければいけません。先生も心苦しいですが、これはフェリアル君のためですからね」
つい数秒前に頬を叩いた手で、今度は頭を撫でられた。
まるで壊れ物でも扱うみたいな、さっきとはまるで違う触れ方にゾワッと鳥肌が立つ。
「っ……！」
非対称な言動を繰り返す先生を前に、じわじわと恐怖が湧き上がって震えることしか出来ない。
俯きがちに黙り込んでいると、先生は僕の髪をぐしゃりと掴みながら穏やかな声を紡いだ。
「さぁ、もう一度問題を解いてみましょうか」
左頬はまだ熱を訴えたまま。

ニッコリと能面のような笑顔を貼り付けた先生が怖くて、不気味で。
堪えきれなくなった衝動が爆発してしまった僕は、震える足を叱咤してその場から走り出した。
「フェリアル君⁉」
驚いたような声が背後から聞こえるけれど、それも無視して部屋を飛び出す。
授業を放って逃げ出してしまった罪悪感と自己嫌悪と、先生から離れられた安堵……複雑な感情が渦巻く胸中に気持ち悪くなりながら、僕はとにかく全力で廊下を駆けた。
深いことは何も考えず、ただがむしゃらに走った後でふと我に返った。
「あ……」
呆然と目を見開き、周囲をぼんやりと見渡す。
どうやら無意識に温室へ足を運んでしまったらしい。冷たい雪に植物が埋まってしまっている庭園と異なり、色鮮やかな花々が咲き乱れる温室の最奥で、僕は一人ぼーっと突っ立っていた。
「……どうしよう。授業、さぼっちゃった……」
じわ、と視界が滲む。
どうしてこんなことをしてしまったのだろう。せっかくお父様たちが家庭教師を雇ってくれたのに、なんの期待にも応えられないどころか、授業そのものを放り出してしまうなんて。
僕はどうして、こんなにもダメな子なんだろう。
溢れそうな涙を堪えながら一歩踏み出す。でも、邸へ戻る気にはなれない。

先生が怖くて、不安で……そして、両親やシモンに見せる顔がなくて。
行く宛もなく放心していると、ふと少し先にある扉に視線が向かった。
「……ここって」
あの扉の先にあるものを、僕は知っている。
数年前にディラン兄様と入ったきり一度も足を踏み入れていないそこが、僕はなんだかものすごく気になった。
あそこにはまだ、例の花が咲き続けているのだろうか。
「……」
迷いつつも、その扉に手をかける。すると、扉はすぐに開いた。
いつもは鍵が掛かっている扉だけど、僕が扉に触れた瞬間開くように、いつだったかディラン兄様が魔法をかけてくれたのだ。
無言で足を進め、最奥に辿り着いた瞬間。
「――……っ」
まるで大海原が広がるみたいに咲き誇る瑠璃色の花々を見て、涙腺は完全に決壊してしまった。
ディラン兄様の優しい笑みが頭に浮かんで、纏めきれない色んな感情が濁流みたいに湧き上がる。
「あぁ……ぼく……ごめっ、ごめんなさい……っ！」
自分でも、自分が今どんな気持ちを抱いているのか理解しきれない。
けれど、どうしようもない自己嫌悪が燻っていることだけは確かに自覚した。

「ごめんなさい……っ」
僕は、期待に応えたかった。
誰からの期待？　なんの期待？　自分でもわからなかったけれど、今わかった。
両親の、兄様達の、シモンの、みんなの。
たくさん迷惑をかけてきたからこそ、そろそろ成長したかった。
両親にいい子だと思われたかった。兄様達に追い付きたかった。シモンに褒められたかった。
『生まれてきてくれてありがとう』
数年前のあの日、ディラン兄様からもらった言葉を思い返す。
僕なんかにあれほどもったいない言葉をくれるような兄様に、家族の皆に応えたくて。
でも、ダメだった。結局、僕は逃げ出してしまった。
授業は遊びと違うのだ。ほんのちょっとくらい受け入れられないことがあったって、それも成長のために必要なことだろうに。
僕は全てから逃げ出して、初めて『幸福』を感じられたこの場所まで逃げ込んでしまった。
「……にいさま」
力なく地面にしゃがみこむ。膝に顔を埋めてぽつりと呟いた。
兄様達に会いたい。きっと今も授業に向き合っているだろう兄様達に、僕も遠くからでも追いつきたかったけれど。
今はただ苦しい。行き場のない感情を抱えて蹲っていると、ふいに自分の影がゆらりと大きく

揺らめいた。
「……？」
一歩も動いていないのに、まるで風に靡くように揺れる影をポカンと見つめる。
そしてすぐ、影がゆらりと立ち上がった。
「わっ！」
驚いて後ろに尻餅をつくと同時に、人型に膨張した影が色付き始める。
影から現れた人物を見上げた瞬間、暗く淀んでいた気持ちがぱぁっと明るくなった。
「シモン！」
なぜか焦燥を滲ませて現れたシモンも、僕の姿を視認するなり酷く安堵したような表情を見せた。
「フェリアル様……！　よかった、ご無事だったんですね！」
シモンにしては珍しい、冷静さを欠いた声を聞いて首を傾げる。
どうしてこんなに震えているのだろう。不思議に思ってぱちくり瞬くと、シモンは呑気に首を傾げる僕を見て深くため息を吐いた。
「窓から庭を走るフェリアル様が見えたものだから、慌てて影に飛び込んだんですよ……」
そう言うと、シモンは脱力したようにふらりと膝をつく。
ぎゅうっと抱き締められて、僕も咄嗟にシモンの背に腕を回した。
どうやら僕はシモンのことをものすごく心配させてしまったらしい。そのことを申し訳なく思いながらも、内心あわあわと冷や汗をかく。

「シ、シモン、ぼく……その」
どうしよう。この状況をどう説明すればいいんだろう。
ただでさえ仮の授業で、それもまだ二日目。それなのに授業をサボってしまったなんて知られたら、シモンに失望されてしまうかも……
口ごもっていると、不思議に思ったのかシモンが僕の肩に埋めていた顔を上げた。
「フェリアル様？　一体何が……って」
シモンの視線が、ふと僕の左頬に集中する。
「は？」
突如として緑色の瞳が黒く染まり、シモンの纏う空気が絶対零度に凍てついた。
「なんですか……ここ、すごく腫れてますけど」
シモンがそっと手を伸ばし、それを僕の左頬に添える。
そこは……そうだ、ついさっき先生に叩かれたところだ。
「あ、これ、バツなの。僕が、いっぱいまちがえちゃったから、先生おこらせちゃって」
お馬鹿なせいでお仕置きされるのは、前世でもよくあった。
何度も問題を間違えてしまったなんて、僕がお馬鹿なことをシモンに知られてしまうのはとても恥ずかしい。
自分を情けなく思いながらそう答えると、なぜかシモンの黒いオーラはますます激情を宿して濃くなった。

「……あの、教師が？」
「うん？」
「あの男が、フェリアル様の頬を叩いたんですか？」
「え……う、うん。でもね、これはバツで」
「フェリアル様」
圧のある声に思わず硬直する。
シモンは底知れぬ激憤を滲ませた瞳のまま、低く這うような声を出した。
「申し訳ありませんが、授業は今日で終わりです」
ゆらりと立ち上がったシモンの表情は、逆光による影でよく見えなかった。

シモンは僕を抱っこすると、影から取り出した氷嚢を僕の頬に当てながら無言で走った。
向かった先はお父様の執務室だ。
僕は困惑しつつもシモンに話しかける勇気もなく、ただ黙って様子を窺うことしか出来なかった。
シモンが静かな声で、入室の許可を問う。
即座にお父様は通してくれた。そして、シモンの腕の中にいる僕を見つけて言う。
「フェリアル？　どうした、今は授業の時間じゃなかったか？」
お父様が不思議そうに首を傾げる。
そのセリフにどう答えたものかと焦ったのも束の間、お父様は僕の頬を見るなりサッと顔を強張らせた。
「その頬……怪我でもしたのか？」
慌ただしく立ち上がったお父様が、執務机を回り込んで駆け寄ってくる。
氷嚢をそっと離して僕の左頬を確認した途端、お父様は表情をみるみる怒りの色に染めた。
「これはッ！　一体どこの輩がこんな真似をした!?」
見たこともないほど激しい憤りを見せるお父様を呆然と見上げる。
固まる僕をあやすように撫でながら、シモンがその問いに淡々と答えた。
「家庭教師のアドルフ・ライラです。授業中にフェリアル様の頬を叩いたようで」
「っあ、あの、でもね、これはバツで……」
なにがなんだか分からないけれど、とにかく二人がとっても怒っていることは分かった。
そしてその矛先は、どうやらアドルフ先生に向かっているらしい。そう察した僕は、慌てて先生の行動について説明しようとしたけれど、その弁明はお父様によって遮られた。
「どんな理由があろうと大人が子供に暴力を振るうのは犯罪だ。ましてやフェリアルは公爵家の令息なのだ、これがどれほどの重罪か……」
お父様が拳を握り締めてわなわなと震える。
そしてふいに力を抜くと、シモンの腕から僕の身体を抜き取った。今度はお父様に抱っこされて、僕はお父様が纏う淡い香りを目一杯吸い込んだ。
やっぱり、お父様の抱っこはすごく落ち着く。

「騎士団を呼べ。不敬な大罪人を今すぐ邸から追い出すのだ」
普段の温厚な雰囲気はどこにもない。
重々しい空気を纏いながら命令したお父様を見上げ、僕はぎょっと目を見開いた。
「お、おとうさま？　おこ、おこってるの……？」
ぷるぷると震えながら尋ねると、お父様は僕をぎゅうっと抱え込んだ。
「当然だろう。私の大事な息子に傷を付けられたのだぞ」
その言葉を聞いてハッと息を呑んだ。
お父様の大きな手から底知れぬ怒りが伝わってくる。けれど、僕の背や頭を撫でるその手はとても優しかった。
なぜだか目頭が熱くなって、湧き上がってくる衝動を隠すようにお父様の肩にぐっと顔を埋める。
「……ごめんなさい、お父さま」
何に対する謝罪なのか、自分でもよくわからない。
なんだかとても苦しくなったのだ。僕は『僕』という存在に価値を感じていないから、僕のことでこんなに憤るお父様に対して、なぜだかすごく胸が締め付けられた。
僕が震える声で言うと、僕を抱き締めるお父様の腕にぎゅっと力が籠った気がした。

＊＊＊

それからは、あっという間に事が過ぎ去った。
アドルフ先生は公爵令息に対する暴行という重罪を背負うことになり、お父様が直々に呼び出した騎士団に連行されていった。
帝国法では、貴族への暴行は極刑もあり得るほどの重罪と位置付けられているそうだ。先生は僕を躾のためにちょっぴり叩いただけだけれど、重い罰からはまず逃れることは出来ないだろう、と後から聞いた。
僕がお馬鹿なばっかりに起こった件だっただけに、なんだか罪悪感が否めない……
けれど、落ち込んでいるのはどうやら僕だけのようだった。
シモンもお父様もお母様も、それだけじゃない。エーデルス騎士団のみんなも使用人たちも、全員がアドルフ先生を憎み、心の底から憤っていた。
前世では躾と称して叩かれることなんてよくあったから知らなかったけれど、どんな理由があっても子供を叩くのはいけないことみたいだ。
痛々しく腫れた頬が治るまで、邸の皆がピリピリと怒りっぱなしだったけれど……正直、僕を全力で心配してくれる皆の様子が嬉しかった、なんてこの空気の中では絶対に言えない。
そんなこんなで、公爵家を騒がせた事件の余韻は、頬が癒えていくと同時に落ち着いていった。
そして僕は、しばらく家庭教師を雇うことを禁じられた。
今回のような前例が出来てしまった以上、他人に僕の教育を任せることを両親が忌避するようになってしまったのだ。

どれだけ厳正な採用基準を定めたところで誰も信用出来ないのだと泣きつかれてしまえば、僕に言えることなんて何もなかった。
今回ばかりはものすごく心配をかけてしまった自覚があるし、僕も家庭教師は諦めることにした。
そしてしばらくの間は、シモンが家庭教師の代わりを務めてくれることになった。

「ごめんね、シモン……」
例の事件から数日後。
あの授業で使っていた小難しい教科書じゃない、幼い子供向けのカラフルな教科書を抱えながら、僕はしょんぼりと眉尻を下げた。
机を挟んで向こう側にはシモンが立っている。
僕のセリフを聞くと、シモンはぱちくりと瞬いた。
「どうして謝るんです？　フェリアル様は何も悪くないのに」
不思議そうに首を傾げるシモンを見上げ、むんと唇を尖らせる。
「だって、シモンいつも忙しいのに。なのに、僕のお勉強まで……いっぱい忙しくなっちゃう」
僕のただ一人の専属侍従として、シモンはただでさえ毎日大忙しだ。
通常は役割ごとに分けられるはずの僕のお世話を、シモンはたった一人でこなしてくれている。
そんな日々のお世話だけでも重労働だろうに、僕の勉強の面倒まで見るはめになるなんて。
シモンからしたら、こんなとばっちりはたまったものじゃないはずだ。

そう言うと、シモンは仕方なさそうに微笑んだ。
「急に何を言うかと思えば……まったく、フェリアル様は分かっていませんね」
「……？」
分かっていないって、どういうことだろう。
はて？　と目を丸くすると、シモンがふふんと得意気に笑った。
「むしろ最高のご褒美ですよ！　フェリアル様に勉強を教える役割を担(にな)えるなんて！」
心底嬉しそうに語るシモンを見て、今度は僕がぱちくりと瞬いた。
僕の先生をすることに、そこまで嬉しがる要素があるだろうか？
シモンに関しては今よりずっと忙しくなるだけで、メリットなんて一つもないように思うけれど。
困惑していると、シモンは何やら恍惚とした表情でブツブツ呟き始めた。
「俺がフェリアル様にこの世の全てを手取り足取り……ぐへへ」
「シモン、はなぢ、はなぢ」
によによと緩みきった笑みを浮かべているシモンの鼻から、ふいに鼻血がたらーっと伝った。
いつものやつか、と思いながら、汚れてもいいハンカチを慣れた手つきでそそくさと渡す。
シモンはハッとして、それを受け取ってくれた。
「あぁすみません、抑えを利かせずに全力で妄想してしまったもので、つい」
シモンの鼻血って、血流が騒いじゃうくらい妄想するせいで溢れるものだったのか……
鼻血を噴き出していたとは思えないほど、血を拭うシモンの動作はとってもスマートだ。

そんな今日も今日とて残念なイケメンさんのシモンを見上げ、僕は困り顔で微笑んだ。
「あんまり鼻血ぷしゃーすると、貧血なっちゃうから、もーそー？　ほどほどにね」
そう言うと、シモンはニコリと笑って頷いた。
「えぇ、なんとか自重します。ですがそれならフェリアル様も、俺に鼻血ぷしゃーさせるような尊い言動は控えていただけると幸いです」
「とーとい？」
上目遣いでぱちくり瞬くと、シモンは「そういうとこです」と安らかな顔で呟いて再び鼻血を噴き出した。
それに対して僕が二枚目のハンカチを手渡し、シモンが血を拭う二度目の作業をサラッとこなす。
シモンは、二枚の血塗(ちまみ)れハンカチを大事そうにポケットへ仕舞いつつ、コホンッと咳払いをした。
「とにかく！　これからは俺がフェリアル様の先生を務めますし、そのことに一切不満を抱いていないどころか歓喜しているので、フェリアル様が不安になる必要はありませんからね！」
わかりましたか⁉　と前のめりに問われ、その勢いに押されてこくこくと頷く。
正直、まだ申し訳なさはあるけれど……シモンがここまで言うのだから、先生の話もありがたく受け入れておこう。
「シモン、ありがと。僕もね、ほんとはね、シモンが先生になってくれて、うれしいの」
頬を染め、もじもじと両手の指先を絡めて小さく語る。
するとシモンは、またもや「ぐはッ」と呻いて鼻血を噴き出した。なんだか、今日はいつにも増

して鼻血ぷしゃーが激しい日だなぁ。
コホンッと咳払いをして、シモンが姿勢を正す。
緑色の目が僕を捉えた。
「……俺も、フェリアル様と一緒に居られる時間が増えてとっても嬉しいです」
そう言うと、シモンはふと膝に手を当てて屈みこんだ。
僕と同じ目線まで腰を折ると、ふわりと笑って僕の頭を優しく撫でてくれる。
「いいですかフェリアル様。知らないことは悪いことじゃないし、むしろ知らないことを知る楽しさを学ぶのが授業というものです。だからこれからは、色んなことを楽しく学びましょうね」
穏やかな声で紡がれるその言葉を聞いて、胸の奥までじわりとくすぐったい温もりに包まれた。
「……うん、ありがと。ありがとう、シモン」
『やさしい歴史』と書かれた教科書をぎゅっと抱え、そこに顔を埋めるようにして俯く。
なんだか目頭が熱くなった気がして、慌てて目を強く瞑(つむ)ってそれを堪えた。
知らないことは、悪いことじゃない。
知らないことを知る楽しさを学ぶのが、授業というもの。
そんなの初めて聞いた。前世では、僕が「知らない」と言うと、みんなが僕を叱ったのに。
何かを学ぶって、もっと怖くて不安なものだと思っていた。実際、あの頃はそうだったから。
でも、ここでは違うみたいだ。
「……あのね、僕ね、おんなじところ、まちがえちゃうの」

ぽつり、ぽつり。
優しい言葉を聞いて逆に不安になってしまった僕は、ぽつぽつと呟いた。
シモンは俯く僕に目線を合わせたまま、小さく頷いて続きを待ってくれた。
その優しい反応にまた涙が浮かびそうになりながら、なんとか最後まで言葉を紡ぐ。
「おんなじこと、何回もまちがえるとね、きっとがっかりするの。呆れて、僕をきらいになるの。でも、ぼく……シモンには、きらわれたくないな……」
ひっくと嗚咽交じりの泣き声が漏れる。
俯いて堪えて、なんとか隠していたのに全部無駄になっちゃった。
怖くて、不安で、ただ震えて泣くことしか出来ないでいると、ふといつの間にか回り込んできていたシモンに、ぎゅうっと強く抱き締められた。
「……シモン？」
驚いて一瞬だけ震えが止まる。そして、気付いた。
なぜか、僕だけじゃなくシモンまで震えていた。さっきまで優しい笑みを浮かべていた顔が、なんだか切実そうな、泣きそうな表情になっていた。
「ガッカリなんてしないし、嫌いにもなりません！」
叫ぶように訴えられたそれに、思わず息を呑んだ。
シモンは目を見開く僕を抱え込んだまま、再び大きく叫ぶ。
「ていうか！　同じところを何度も間違えるなんて勉強あるあるですから！　何かを一発で覚えられる人間なんて滅多にいないし、何度も間違えて当然ですから！」
ぱちくりと瞬く。
勢いに押されて固まっていると、やがてシモンはパッと顔を上げて宣言した。
「子供が分からないと言ったら分かるまで教える、それを何度だって繰り返す、それが教師の……いや、大人の役目です！　間違える子供が悪いんじゃなく、根気のない大人が悪いんです！」
あまりに当然のごとく断言されるものだから、僕もうじうじと考え込む暇もなく頷いてしまった。
「そ、そう、なの」
「そうです！」
「僕……まちがえてもいいの」
「間違えてもいいんです！　どんとこいです！」
胸をポンと叩くシモンを呆然と見つめ、やがて小さく噴き出した。
いつの間にか涙は止まっていた。
僕は一度机に教科書を置いて、シモンをぎゅっと抱き締め返す。
「うれしい。シモンが、先生になってくれて。シモンと一緒にいられる時間、いっぱいで……僕、とってもうれしい」
ふにゃふにゃと頬を緩めると、シモンも嬉しそうにはにかんだ。
結局、家庭教師を雇うことは出来なかったけれど……でも、結果的に一番良いところに収まった

からよかったのかもしれない。
今はシモンと一緒に勉強をして、家庭教師の件はしばらく経ってからまた考えよう。
「――それじゃあ、授業を始めましょうか」
アドルフ先生の時みたいに威圧的な空気でもなければ、お兄さん向けの難しい教科書でもない。
穏やかな雰囲気と共にわくわくと鼓動が高鳴る中、今日の授業が始まった。

攻略対象ｆｉｌｅ４：最恐の暗殺者
第一章　舞踏会

とある寒い日のことだった。
いつものように朝食を済ませ、ウサくんと雪遊びに行こうとした時、ふと執事が部屋にやってきてお父様が呼んでいると報せに来た。
僕はそれを聞いてすぐに着ていたコートを脱ぎ、マフラーとネコミミ帽子も全て取り払い、慌ててお父様のもとへ向かった。

「フェリ！　おはよう。今日も最高に可愛いね！」
応接室の扉を開くと、そこには見慣れた友達――ライネスの姿があった。

その向かいには眉間を押さえるお父様とニコニコ笑顔のお母様が座っていて、何やらカオスな状況だ。
それに、お父様が手に持っている封筒にある紋章は皇宮のものみたいだけれど……
「ライネス、おはよう。ライネスは今日もかっこいいね」
そう言いながら彼らに近寄り、お疲れの様子のお父様に用件を問う。
「お父さま。よびましたか……およ、お呼びですか」
いつもの調子で聞いてしまいそうになり、慌ててシモンから教わったばかりの敬語に直した。
こうして突然呼び出されるのは珍しいから、どんな真剣な用件なのかと思えば……ライネスまで居るのはどうしてなのだろう。
大公子だから、普通の貴族よりもずっと忙しい身のはずだけれど。
僕の問いに、お父様が顔を上げて答える。
「おはようフェリアル、朝から呼び出してすまない。少し面倒なことが起こりそうでね……フェリアルにも伝えておきたくて呼んだのだ」
疲労を滲ませた様子のお父様を心配に思いながら、空いているライネスの隣に腰掛ける。
ライネスは「突然来ちゃってごめんね、びっくりしたよね」と困ったように微笑んだ。
僕はううん、と首を横に振る。
「大丈夫。雪あそびをね、しようかなってところだったの。雪あそびはいつでもできるから、大丈夫だよ」

「かわっ……！　そ、そっか。雪遊びの邪魔しちゃってごめんね。お話終わったら、一緒に雪遊びしようね」
「いっしょ？　たのしみ。ありがと」
ふにゃあと緩みきった笑みを浮かべるライネスに、こくりと頷く。
雪遊びは一人でするより二人でした方が楽しいから、ライネスの言葉はとても嬉しい。早く雪遊びをしたい衝動に駆られ、ライネスの言うお話について真剣に聞く体勢になった。
「おはなしって、なぁに？」
ライネスと出会ってから一年以上が経つけれど、彼が事前の手紙もなく邸に来たのは初めてだ。
大公家の悲劇を阻止して以来、執務がない日には、毎日のようにライネスは公爵邸に遊びに来てくれるようになった。距離が遠くて中々会えないと思っていたけれど、そんな苦労は一切見せずに毎朝手紙を送って邸に訪れて……それが日常のようになっていた。
レオが邸に通っていた頃のような賑やかさが蘇って嬉しいけれど、それにしたって北部から東部への移動をほぼ毎日というのは辛いだろう。
手紙なしに突然訪れたということは、もしかして今日はそのことを話しに来たのかも。
これ以上は面倒だから来られない、とか。
悲しいけれど、それを言われてしまえば僕は何も言えない。覚悟を決めないと、とひとりしょんぼりし始める僕にライネスが語ったのは、全く予想していなかった言葉だった。
「舞踏会のパートナーとして、私を選んでほしいんだ」

「……？　ぶとうかい？」
きょとんと目を瞬く僕に、眉間を押さえていたお父様が溜め息交じりに説明してくれた。
「今度、皇宮で舞踏会が開かれるんだ。第二皇子殿下の披露目を兼ねているからか、歳が同じフェリアルにも招待状が届いたんだが……ヴィアス公子はそれをどこから嗅ぎ付けたのか、一足先にパートナー候補にと名乗り出てきたんだよ」
「公子だなんて。私のことは気軽にライネスとお呼びください、公爵。あ、それなら私は公爵のことをお義父様、とお呼びした方がよろしいでしょうか？」
ニッコニコのライネスを、お父様は笑顔で見据えてグシャリと封筒を握りつぶす。
大丈夫かな、その手紙、皇族からの招待状のはずだけれど。
「ははっ。公子、少々ご冗談が過ぎるかと」
額に青筋をぴくぴく浮かべるお父様の隣で、お母様は少女のように頬を赤らめて「まぁまぁ！」と高い声を上げた。
「素敵ねぇ。青春ねぇ。公子様になら安心してフェリを任せられるわ」
「ク、クロエ！　フェリアルに青春はまだ早いのではないか？　それにこの男が一番危険だと思うのだが――」
「あなた。公子様に失礼でしょう？　こんなにフェリに良くしてくれて、フェリだっていつも楽しそうに公子様の話をするじゃない。私はパートナーの件、大賛成よ」
「クロエ……！」

楽しそうなお母様の言葉に、僕は照れくさくなって顔を伏せた。
そこへ、ライネスが嬉々として顔を覗き込んで尋ねてくる。
「へぇ。フェリ、いつも楽しそうに私の話をしてくれるの？」
その言葉に含まれている揶揄いを聞き取って、僕はぷいっとそっぽを向いた。真っ赤な耳がライネスから丸見えになっていることには気付かないままで。
「うぐッ!!」
なぜか悶え始めるライネスにきょとんと首を傾げる。
ライネスったらどうしたんだろう……と困惑していると、お父様が渋々といったように呟いた。
「はぁ……まぁ確かに、陰湿にフェリアルの貞操を狙う輩よりかは公子が幾分マシかもしれないな……」
それを耳聡く聞き取ったライネスは、キラキラッとレオに似た爽やかな笑みを浮かべて語り始めた。
「私をパートナーとして認めてくださるということですね!? 嬉しいです、お義父様！」
「次にお義父様と呼んだら、以降送られる求婚状は全て燃やします」
「一枚目から燃やしているでしょうに……」
ふいに始まる大人のお話。僕が理解出来ない話が始まったらその合図だ。
求婚状ってなんのことだろう。疑問を二人に問う前に、ピリピリしたお父様と話していたライネスが笑顔で僕を振り返った。

「何はともあれ、やったねフェリ！ 一緒に舞踏会へ参加できるよ！」
「ほんと？ おかし一緒に食べられる？」
「お菓子一緒に食べられるよ。フェリはまだ九歳でダンスはないはずだから、万が一誘ってくるような男がいたらすぐに私に教えてね」
にっこりと微笑まれて大きく頷く。
「うん。僕おどれないから、困る。だから、すぐライネスに教える」
「ふふ、いい子。フェリは本当に可愛くていい子だね。大好きだよ」
「かわいくない……けど、僕もライネスすき」
ふにゃあと頬を緩めると、何度目かの呻き声が返ってくる。鼻血まで噴き出しているからとんでもないダメージを負ってしまったのだろう。
今日のライネスは、なんだかシモンみたいだ。
「なんだ、なんなのだ。この雰囲気は……」
「あなた。我が子の春を見届けるのも父の役目でしょう？」
「それは分かっている！ だが！ だがフェリに春はまだ早い……！」
ぐぐぐッ……と拳を握り締めるお父様が気になったけれど、お母様がゆるふわーっと宥めてくれているみたい。気にせずライネスに視線を戻した。
ライネスは嬉しそうな笑顔を絶えず向けてきて、僕が何か話す度ふにゃふにゃと笑う。
その様子にぱちぱちと瞬いた。

立ち読みサンプル
はここまで

「ライネス、ごきげん？」
「うん？　ふふ、もちろん。フェリと過ごしている間はいつだってご機嫌だよ」
「そっか。じゃあ僕もごきげん」
「かわッ……！」
ライネスがぐわーっと悶え始める。またかぁ、と特に反応せず流した。
舞踏会――第二皇子殿下の披露目。
ゲームの過去編にはなかったイベントだから、大きな事件は起こらないはずだ。
とにかく公爵家の名前を汚さないようにだけ気を付けよう。
そう密かにぐっと決意する僕を見下ろし、ライネスは「雪遊びに行こっか」と爽やかに嬉しい提案をしてくれた。

【嫌な気配】

それから、僕はライネスとシモンと一緒に、雪の積もった庭園に出た。
せっせと雪を丸める僕を、二人はのほほんと微笑ましそうに眺めていた。
「ウサくん、できた」
雪で作り上げたデフォルメされたウサくん。

毎年作っているからか、年々クオリティが上がってきた気がする。どれだけ上がったかというと、ガイゼル兄様も一目でウサギだとわかるくらいの出来栄えだ。
まだまだ形は歪だけれど『山作るの上手いな』とガイゼル兄様に言われていた頃に比べれば大きな進歩だ。
長い耳を落ちないようにきゅっきゅとつけてパッと手を離す。ライネスとシモンの方を振り返ると、二人はぱあっと表情を輝かせてぱちぱち拍手し始めた。
「流石フェリアル様！　ウサくんも嬉しそうです！」
「とっても上手だねフェリ。最高にキュートなウサくんだ」
キラキラ笑顔の二人が、雪ウサくんの出来栄えをわぁっと褒めてくれる。
抱えていたぬいウサくんをシモンが右に左にと揺らして語る姿に心がぽかぽか温まった。
本当だ、何だかとても嬉しそうに見える。
「次はね、うにくん作る」
褒められたのが嬉しくて、早速次の作品に取りかかろうと雪をかき集める。
あと作っていない友達は……と考えてシモンの影であるうにくんの名を挙げると、シモンが笑顔のままピタッと硬直した。
「……えっ。う、うにくん作るんですか？」
「うん？　うん。うにくん作る」
うにくんを作ると何かまずいことでもあるのだろうか。